

インストラクター検定試験講評

今回の検定試験は初めての試みであり、試行錯誤のなかで行われたが、受験者の強い合格意欲が感じられた。

インストラクターの資質として求められるものは、種の同定能力であるが、それだけではない。今回の検定では、地域の取り組みや調査結果の評価や伝達、更に国内外の情勢など、幅広い範囲で出題された。それは生きもの調査の目的が何であるかをしっかりと理解できているかどうかを判定するのが目的であった。

検定試験の結果を見ると、動物編の種の同定能力試験は、普段から生きもの調査を実施しているものとしていないものとの差が明確に出ていたようだ。今回の検定試験で点数の低かった受験者は、生きもの調査の実施回数を増やすことで種の同定能力は向上するので、頑張って欲しいと思う。

動物編以外の試験は、生きもの調査が持っている様々な意味を参加者に説明するために必要な項目であり、普段から意識することが大切である。認証制度があるから生きもの調査に取り組むのではなく、生きもの調査をすることが、自分たちの集落の暮らしを守り、様々な生きものたちの命を育むことに繋がっていることを説明できなければ、インストラクターとは言えない。

科目ごとの講評は以下のとおり。

地域特性を活かした活動に関する知識と技法

今回の受験者は全員が佐渡在住であったので、認証制度への日常的な関心の高さが平均正答率 90%という高い数字にした。更に 100 点満点が 8 人も出たことは喜ばしい。しかし取り組みと面積の関係を問う【問題 4】は正答率が低く、それは魚道の設置面積とビオトープの設置面積を取り違えたものであった。佐渡の認証制度では魚道の設置面積が当初の 40 倍になっていることを認識して欲しい。

生きもの調査結果の評価と伝達に関する技法

この問題はテキストの文章をしっかりと読みこめば解答できる問題であった。その結果、100 点満点は 9 人も出た。全体の平均正答率は 78%であり、日常的に文章に触れる機会の少ない受験者がいたことが原因ではないかと思われる。しかし、この問題はテキストの内容をしっかりと理解してもらうことが目的であり、それがインストラクターの資質として大切な要素である。今回の試験でこの問題に正答ができなかった受験者は点数のことを気にするのではなく、テキストを何度も読み返し、内容をきちんと理解することに努めて欲しい。

生きもの調査に関わる国内外の情勢

この問題は内容的にはかなり高度であるが、それぞれの項目についての基礎的な理解度を問う問題であった。内容の理解だけでなく、現在の諸問題が置かれている歴史的位置の理解度も問う問題であった。しかし結果的には平均正答率は 50%であり、最高得点は 78 点であった。

インストラクターは生きもの調査の目的を問われた時に、様々な角度からの説明を必要とされるので、今後の学習に期待したい。

【問題 8】は国内での生きもの調査の歴史への理解度を問う問題であったが正答率は 17%であった。インストラクターには佐渡以外の取り組みにも関心を持って欲しいし、現在問題になっているネオニコチノイドの問題がヨーロッパではかなり早い時期から問題となっていることを認識して欲しい。

【問題 9】も正答率が 34%と低かったが、これはテキストには記載しているが講習会での説明不足が原因と想定されるので今後、改善する予定でいる。

動物編

今回のインストラクター検定で一番重要な試験問題であり、この問題の平均正答率は 65%、100 点満点は 1 人出た。インストラクターとして生きもの調査の現場で問われる資質が種の同定であることは間違いない。しかし種の同定は机上の学問ではないので、日常的な生きもの調査の経験回数によって大きな差が出る。今回の検定試験の結果を見ても、その傾向は強く、この科目で点数が低かった受験者は、とにかく生きもの調査の経験回数を増やすことが大切である。生きもの名前が特定できるようになると、更に生きもの調査が楽しくなり、そうすればインストラクター検定試験に合格できる。

平成 24 年 12 月 6 日

特定非営利活動法人活動法人
生物多様性農業支援センター
理事長 原 耕造